

## 「細雪」より抜粋

取り分け鯛の好きな幸子（さちこ）が、妙子（たえこ）に此処を紹介されてから、忽ちこの鮨に魅了されて常連の一人になったのは当然であるが、実は雪子も、幸子に劣らないくらいこの鮨には誘惑を感じていた。少し大袈裟に云うならば、彼女を東京から関西の方へ惹き寄せる数々の牽引力の中に、この鮨も這入っていたと云えるかも知れない。彼女がいつも東京に在って思いを関西の空に馳せる時、第一に念頭に浮かぶのは蘆屋の家のことであるのは云う迄もないが、何処か頭の隅の方に、折々は此処の店の様子や、親爺の風貌や、彼の庖丁の下で威勢よく跳ね返る明石鯛や車海老のピチピチした姿も浮かんだ。彼女は孰方（どちら）かと云えば洋食党で、鮨は格別好きと云う程ではないのだけでも、東京に二た月三月もいて、赤身の刺身ばかり食べさせられることが続く、あの明石鯛の味が舌の先に想い出されて来、あの、切り口が青貝のように底光りする白い美しい肉の色が眼の前にちらちらついて来て、それが奇妙にも、阪急沿線の明るい景色や、蘆屋の姉や妹や姪などの面影と一つものように見え出すのであった。

（中略）

**親爺**「娘（むすめ）さん、むしぎ早いお上りなわさ」

と、親爺が例の癖を出して、まだ手を着けずに眼の前の鮨を見守っている雪子に云った。

妙子「雪姉（きあん）ちゃん、何してるの？」

雪子「この蝦、まだ動いてるねんもん。……」

雪子は此処へ食べに来ると、外のお客達と同じ速力で食べなければならぬのが辛かった。それに、切の身にしてまで蝦の肉が生きとびるびる顫えているを自慢にする所謂「おどろ鮨」なるものが、鯛にも負けないくらい好きなのではあるが、動いている間は気味が悪いので、動かなくなるのを見届けてから食べるのであった。

貞之助「その動いてるのんが値打やがな」

幸子「早よ食べなさい、食べたかて化けて出えへんが」

株屋「車海老のお化けなんか、出たかて恐いことあれしまへんので、株屋の旦那が半畳を入れた。

幸子「車海老やったら恐いことないけど、食用蛙は恐かったわなあ、雪子ちゃん」

貞之助「へえ、そんなことがあったんか」

幸子「ふん、あんさん知らなわれへんけど、いつか渋谷に泊ってた時、兄ちゃんがあたしと雪子ちゃんを道玄坂の焼鳥屋へ誘って入れはらまてたん。そしたら、焼鳥の汁が好みやないとおおまじたけし、おまじ食用蛙を殺して焼くわ。その時蛙がギョッと泣いたんで、二人とも青くなって、雪子ちゃんはその晩じいじいその声が夜じいじい耳に聞こい、……」

雪子「ああ、その話止めい、——」



雪子はそっと口を、もう一度じげじげと蝦の肉を透かして見て、「おべり鯨」が躍らなくなったのを確かめてから箸を取った。

**\*留意事項**

- 部門・エントリナンバー・氏名・作品名・本文の順でお読みください
- 中略は読みません
- 複数応募の場合でも、一課題ごと1録音してください（連続録音は不可）
- 効果音やBGMは使用不可
- 群読や複数での朗読は不可
- 朗読より大きな音、二重録音など録音状態の悪いものは不可